

## 心のバリアフリー

中 二

乙武洋匡さん、国枝慎吾さん、そして私。三人の共通点、それは車いすで夢をかなえるために積極的に生きていることです。

乙武さんは「五体不満足」などの著作や小学校教師の経験からテレビにも多く出演しています。国枝さんはプロの車いすテニスプレイヤーで、世界ランキング一位の選手です。乙武さんの行動力と人間としての魅力は言うまでもありません。国枝さんの世界一の車いす操作やテニスのテクニクはプロのスポーツ選手そのものです。

しかし、彼らがどんなに活躍していても、車いすの人イコールかわいそうな人というイメージが世の中から消えないことは、とても残念なことです。

私は病気のため二歳から車いすで生活しています。みんなと同じようにできないこともたくさんありますが、幼稚園、小学校、中学校と普通の子

供たちと一緒に生活し、学んできました。

私には三才上の兄がいます。両親は兄と私を同じようにたくさん愛情を注いで育ててくれました。小さな赤い車いすに乗っているいろいろな所に出かけると、誰とでも笑顔で仲良くおしゃべりする子だったそうです。また、兄は学校から帰るとたくさん友達を家に呼んで、私も一緒に遊んでくれました。だから私にとって学校に行って勉強して、友達と遊んでというのは当たり前のことでした。「車いすの子がいるよ。どうやって接すればいいのか？」進学するたびに車いすの私に対する人の目が語っていました。

車椅子で生活していると、不便なこと、悔しいことはたくさんあります。段差や階段は学校や街中のいろいろなところにあって、乗り越えられません。スポーツや学校の授業でも、みんなと同じようにはできません。人混みで身動きがとれなくなったり、林間学校や修学旅行で山登りができなかったりして、一人で待っている時は悔しくて泣きたくなりました。デイズニーランドで乗れないアトラクションもあります。外出すれば、じろじ

ろ見られたりします。

人はなぜ、障害があるとかわいそうな人と思っ  
てしまうのでしょうか。それは普通ではないという  
勝手な偏見があるからではないでしょうか。目が  
悪い人がメガネをかけるのと同じように、足が不  
自由だから車いすで移動するのです。どちらも生  
活を改善するための大切な道具ですが、メガネは  
多数派で、車いすはごく少数派だけなのです。

乙武さんは自分の不自由な体を個性と語ってい  
ます。私の通う中学校では、車いすと言えば私の  
ことだとすぐわかるでしょう。それが私の個性。  
みんなと違うけれど、私の個性は学校でも地域の  
人たちにも受け入れられています。

先生たちは、何でもチャレンジできるように  
ルールを考えたり、工夫をしてくれたりしました。  
クラスでは、

「車いすなんて関係ないよ。」

「友達なんだから、当たり前前でしょ。」

と言って、一人のクラスメイトとして接してくれ  
ています。通院のため学校を休めば、明日の連絡  
を教えてください、ノートを貸してくれたりしま

す。

私が学校で勉強して、歌って、走ったり、ダン  
スをしたり、おしゃべりや冗談を言って笑ったり、  
行事も普通にできることを周りが理解してくれた  
のです。「なんだ。普通でいいのか。」みんなの気  
持ちがそんな風に変わるのには、いつもそれほど  
時間がかかりませんでした。みんなと違うのは自  
分の足で動くか、車いすで動くか、ただだからで  
す。

五年後には、東京オリンピック・パラリンピッ  
クが開催され、日本中の多くの人に障害者スポー  
ツが理解されるでしょう。そのためには、建物を  
バリアフリーにしたり、専用の設備を造ったりす  
るだけではだめだと思います。

心のバリアフリーという言葉があります。周り  
に障害のある人や外国人がいたら、敬遠しないで  
心の壁（バリア）を無くして、普通に接してほし  
いです。困っていたら、声をかけたり、手を差し  
のべてほしいです。障害があっても無くても人生  
を楽しむこと、社会のために役立つことが当たり  
前の世の中にしていくためには、心のバリアフ

リーが必要なのです。

乙武さんも国枝さんも、車いすで前向きに生きて夢をかなえられたのは、家族の深い愛情と理解があったからこそです。もちろん私の家族も同じです。相手を大切に思っけて支え合っけていくことを教えられました。だから、友達にも先生にも恵まれました。

私は自分が周りの人に支えられているように、大人になっけたら困っけている人の気持ちを理解して、一緒に考え、助けて、笑顔にできるような仕事に就きたいと思っけています。